Osaka University Knowledge Archive

Title	ギー・ドゥボールの初期映画におけるニュース映画の「転用」
Author(s)	武本, 彩子
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 8, p. 35-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92602
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ギー・ドゥボールの初期映画におけるニュース映画の「転用」

アート・メディア論　博士前期課程 2 年
武本　彩子

はじめに

著述家、革命的思想家、映画作家であるギー・ドゥボール（1931-1994）は、1957 年に結成された、前衛芸術家や活動家らから成るシチュアシオニスト・インターナショナル(Situationist International、以下「SI」)の中心人物でもある。フランスを中心として、西ヨーロッパの国々や北欧、アメリカ、アルジェリアなどに支部が存在し、活動期間 15 年の間に総勢 70 名以上が参加した SI は、「具体的かつ意図的に構築された生の瞬間[1]」としての状況（situation）の構築にその活動理念を定め、集団での芸術的実践、政治的発言や行動を活発に行った。第二次世界大戦後に現れた芸術家グループの中では「いちばん積極的に政治参加した運動[2]」と評されることもある。1967 年のドゥボールの著作『スペクタクルの社会』は、高度資本主義・大量消費社会を、「スペクタクル」という観点を軸に批判的に描き出し、他の SI の著作とともに 1968 年 5 月のパリでの学生や労働者を中心とした蜂起（「五月革命」）にも影響を与えた。

映画作家としてのドゥボールは、生涯で 6 本の映画を監督した。ドゥボールの映画は、彼が 1984 年に自身の映画一切のフランスでの上映を禁じて以降、研究者でさえほとんど見ることができず、シナリオを頼りに内容を推測するほかなかったが、ドゥボールの死から約 10 年を経て、遺族の協力により DVD 化され、内容を実見しての検証が可能になった。本発表では、1950 年～60 年代初頭に製作された初期のドゥボールの映画が、「シチュアシオニスト」としての当時の芸術観・政治観を色濃く反映していると考え、彼や SI のメンバーが積極的に用いた「転用(détournement)[3]」という手法に注目する。ニュース映画や広告映画などのフッテージ映像の「転用」は、ドゥボールの映画の核となる特徴的な手法であるが、特に現実社会の出来事を報道したニュース映画の転用は、彼の同時代の政治状況への関心が視覚表現として明瞭に現れた点であると考える。本発表では、発表者が同定したオリジナルのニュース映画の参照と比較を通して、ドゥボールの政治的関心と作品の意図を明らかにするとともに、当時のフランスの映像メディアを取り巻く状況との関連から、彼の用いた「転用」の意義について考察する。

---

[1] 匿名記事「定義」『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト 1 状況の構築へ ――シチュアシオニスト・インターナショナルの創設』木下誠監訳、インパクト出版会、1994 年、43 頁。

[2] ハル・フォスター、ロザリンド・E・クラウス、イヴ-アラン・ボワ、ベンジャミン・H・D・ブークロー、デイヴィッド ジョーズリット著『ART SINCE 1900 図鑑 1900 年以後の芸術』尾崎信一郎、金井直、小西信之、近藤学編、東京書籍、2019 年、453 頁。

[3] 「détournement」の訳語としての「転用」、および各映画の題名は、木下誠による訳を参照した。

1. ドゥボールの映画と「転用」

ドゥボールがSI結成前の1950年代半ばから理論化し、仲間たちと実践してきた「転用」とは、既存の文章や言葉、図像や映像などの芸術的な諸要素を取り出し、異なる文脈や段階において再使用することによって、新たな意味や関係性を創出する方法である。ドゥボールは、1956年の「転用の使用法」という文章の中で、「意味を奪われ、忘れられたオリジナルに関する無関心を強調し、転用された要素の積み重ねがある種の崇高さを表現にもたらすような段階を構想しなければならない[4]」(強調は引用者)としている。SIの間では、画家のアスガー・ヨルン(1914-1973)による、蚤の市で買ってきた既存の絵画の上から新たに描き加えて前衛的芸術作品とした「転用絵画」や、ある小説の言葉をばらばらにして別の物語を再構成するミシェル・ベルンシュタイン(1932-)の小説による実践など、転用による多くの作品が生み出された。

ドゥボールの映像を使用した転用の実践が見られるのは、1959年に完成した2作目の映画『かなり短い時間単位内での何人かの人物の通過について』(以下、『通過について』)からである。ドゥボールやSIのメンバーの写真、彼らの活動に何らかの関わりがあるパリ市内のいくつかの場所が映し出されるこの映画を、ドゥボールは、「シチュアシオニストの運動のさまざまな起源に関する注解と見なすことができる[5]」としている。約20分間の映画のあいだ、次々とテキストを読み上げるドゥボールを含む3名の声が映像に重ねられる。

パリの情景やカフェで談笑する若者たちのショットなど、通常の記録映画のように始まるこの映画は、途中からニュース映画、真っ白な画面、別の映画の予告と思しきカルトン、広告映画などが断続的に挿入され、それらのモンタージュを中心とした構成へと移行していく。後半には前半に登場したのと同じカフェの若者たちの場面が再び映るが、一度目に生じていなかったカメラのブレや、見学する野次馬たちの映り込みなどが露呈し、後半に向かうにつれて徐々に映画の構造が破綻するような構成がなされている。

2. 転用されたニュース映画

『通過について』では、計14場面にわたって、ニュース映画からの転用が行われている。そのうちの約半数は、民衆と警察の衝突を捉えた場面で、穏やかなパリの景観との対比効果が生じている。先行研究では、元になったニュース映画や出来事を特定してこれらの場面が考察されたものはなかったが、発表者の調査で、ブリティッシュ・パテのアーカイブズ[6]などにより特定でき、1950年〜58年の約9年間に、東京、ロンドン、アルジェ、テヘランなどの各都市での出来事を報じたものであることが判明した。

---

[4]ギー・ドゥボール著「転用の使用法」『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト1 状況の構築へ――シチュアシオニスト・インターナショナルの創設』木下誠監訳、インパクト出版会、1994年、316頁。

[5] ギー・ドゥボール著『映画に反対して　ドゥボール映画作品全集　上』木下誠訳、現代思潮社、1999年、65頁

[6] British Pathé (https://www.britishpathe.com) (2023年8月6日最終閲覧)

もっとも多く、計3場面に渡って挿入されている、日本におけるデモの様子を捉えた映像は、いずれも『東京の暴動[7]』(1952)というニュース映画のものと一致する。1952年5月の東京でのメーデー(通称「血のメーデー事件」)を報じるこの映画では、制圧を振り切り皇居前広場に大量に流入する民衆が「訓練された共産主義のリーダーに煽られた」人々であり、「反政府・反米」を主張していると報道されている。一方、『通過について』を見ると、一人のデモ参加者を警官が集団で取り囲み暴力を加える様子や、警官が催涙弾を投げる場面が抜粋され、「廃棄されなければならないものが存在し続け、それとともにわたしたちの摩滅も続いてゆきます。わたしたちは痛めつけられ、離ればなれにされます。」[8]という、明らかに警察に対して批判的な音声が重ねられている。

そのほか、馬に乗った警察隊らが民衆を制圧する1950年5月のロンドンのメーデーの様子や、テヘランの広場や街頭で、群衆に向かって突進する騎兵隊の様子を捉えた1953年8月のイランの軍事クーデターを報じたニュース映画が使用されている。前者はイギリスの軍映画社製作のニュース映画[9]で使用されたもので、後者は『ペルシアの反乱[10]』(1953)という映画からの抜粋と思われる。オリジナル版では、このクーデターの結果、民族主義路線の首相が失脚し、国王が政権に復帰したことを肯定的に報じるが、のちにこの事件は、石油利権を狙ったアメリカの関与があったことが明らかとなった。

1959年完成の『通過について』の中で使用されたニュース映画の中で、最も時期が近く、フランスとの関連が深いと考えられる出来事は、1958年のアルジェでの植民者のデモから始まるシークエンスである。このデモの様子は、『アルジェのド・ゴール将軍[11]』(1958年)というニュース映画の一場面と合致しており、1958年6月にシャルル・ド・ゴールがアルジェを訪問した際、植民者(コロン)たちが彼を熱狂的に迎える様子が映し出されている。『通過について』では、アルジェリア駐留仏軍の将軍となり、植民地支配の中心的人物となったジャック・マシュ将軍の姿や空挺部隊の行進、同年の秋に政権に返り咲いたド・ゴールの演説の映像がこれに続く。「結局、この国では、今度もまた体制派の人間が暴動の扇動者となった[12]」という音声が重ねられ、現政権への直接的な批判が読み取れる。

この映画の時代背景としては、以下のような状況が挙げられる。1954年からアルジェリアでは、独立を願うアルジェリア民族戦線(FLN)による激しい武力闘争が開始され、FLNと入植者の両者による報復テロによって対立が泥沼化する。1957年、フランスは、仏軍空挺部隊を送り込み、FLNの反乱を押さえつけるが、その制圧の裏側には仏軍による苛烈な拷問があった。1958年から、フランス人植民者を中心に、一旦政権を退い

---

[7] https://www.britishpathe.com/asset/53042/(2023年8月6日最終閲覧)
[8] ドゥボール前掲書、79頁。
[9] https://www.britishpathe.com/asset/73219/(2023年8月6日最終閲覧)
[10] https://www.britishpathe.com/asset/54810/(2023年8月6日最終閲覧)
[11] https://www.britishpathe.com/asset/207947/(2023年8月6日最終閲覧)
[12] ドゥボール、前掲書、77-78頁。

たド・ゴールを「フランスのアルジェリア」の象徴として再び政権に戻そうとする動きが活発になり、結果として 1958 年 9 月にド・ゴール政権が復活した。

これらのニュース映画のフィルムがどこから入手されたのかはさらなる調査を要するが、1950 年〜58 年の 9 年の間に起きたこうした出来事のフィルムが集められ、59 年の映画に使用されたことには、ドゥボールによる何らかの意図が感じられる。「転用」についての彼の言葉に注目すれば、これらのフィルムの使用が「忘れられたオリジナルに対する無関心を強調」しているのではないかとも推測できるだろう。アルジェリアの独立運動に対して早くから支持の姿勢を明確にしていたドゥボールは、1958 年のアルジェやフランスの状況と、1950 年以降にフランス以外の各都市で起きた警察や軍による民衆の鎮圧の場面を並置することで、それらの出来事における共通の構造、すなわち、大国による植民地（的）状況と、体制側の暴力を強調してみせたのではないだろうか。そして、本来体制側の視点から製作された映像を民衆の側から「転用」することで、報道映像の恣意性の高さを暴露する意図も込めたのではないかと考えられる。

3. アルジェリア戦争下のメディア体制

多くのフランス市民にとって、報道映像を見る機会は、1950 年代末までは映画館で上映されるニュース映画に限られており、1960 年代からは、テレビが徐々にその役割を果たすようになった。この移行時期はフランスにおいてはアルジェリア戦争（1954-1962）の時期と合致するものであるが、戦争の激化する当時、フランス本国で人々が映像として見ることのできるアルジェリアの状況は、当局の厳格なコントロール下で承認されたものに限られていた。1957 年頃からは、一部の映画作家たちの間で、アルジェリアの独立を望む人々に焦点を当てた数本のドキュメンタリー映画も撮影されていたが、いずれも一般公開前に検閲にあい上映されなかった[13]。アルジェリア戦争は、フランス当局にとっては、「情報戦・心理戦・言論戦[14]」であった。

アルジェリア独立運動への連帯の意志を早い時期から明確にし、時事問題への活発な発言を行っていたドゥボールや SI らの活動が、このようなメディアを巡る環境の中で行われていたことは考慮に値する。統制された情報環境の中で流通する、文章や図像や映像といった芸術的要素が、大衆にもたらす効果や意味を考慮し、それらを自らの主張・表現に基づいて効果的に「転用」することには、社会に対する深い洞察力と創造的な感性を要する。彼らにとっての「転用」は、単なる文学的・芸術的修辞法ではなく、政治意識に基づく戦略的実践であった。中でも、ドゥボールによる映像の「転用」は、映像自体の恣意性を暴露するものであり、こうした「転用」を通して、ドゥボールは、観客の洞察力と映像を製作者の政治意識を問おうとしたのではないだろうか。

---

[13] 藤井篤「情報戦としてのアルジェリア戦争—フランス側のプロパガンダと情報統制—」『香川法学』27 号、2008 年、244 頁。

[14] 同上、216 頁。